

令和7年5月30日

中標津町議会議長 後 藤 一 男 様

中標津町議会議員 松 村 康 弘

研 修 報 告 書

以下の視察について、次のとおり報告します。

- 1 視察名 文教厚生常任委員会道外視察
- 2 視察先 香川県宇多津町 南部すくすくスクエア
- 3 視察日 令和7年5月13日（火）
- 4 視察事項 南部すくすくスクエアの取組・放課後児童支援・ファミリーサポートセンターについて
- 5 成果（具体的に）

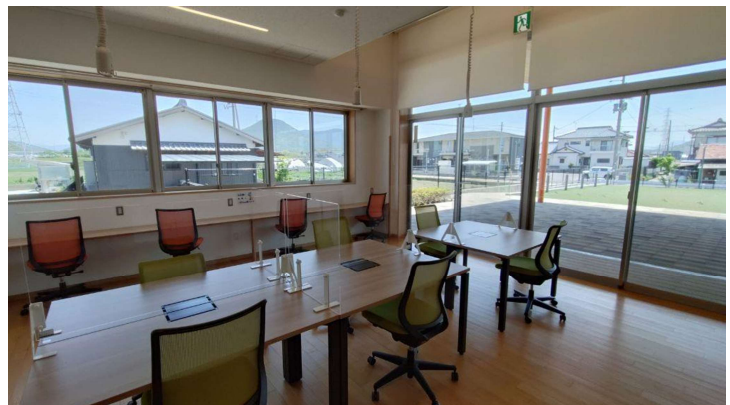
今視察中、最も多い人数に説明員として対応をいただきました。

まず、宮本たかし議長より歓迎のご挨拶をいただき、隣には水本富美子副議長も同席され、お二人とも視察研修を終えられるまで同席いただき、最後の記念写真にも納まっていたいただきました。

さて、表題の南部すくすくスクエアという建物は、宇多津町の南部に住宅等の建設が進み人口が増大するにしたがって、様々な世代を超えた地域交流拠点として、賑わいのある施設建設を目指し、次の機能を備えています。

1. 未就学児の遊び場かつ保護者の子育て相談・交流の場である「子育て支援センター」
2. 小学校の放課後に児童に適切な遊びや生活の場を提供できる「放課後児童クラブ」
3. 中高生の自主学習の場
4. 地域の人が会合等で利用できる「集会室・調理室」に加えて憩いの場としての「カフェ」

教育委員会の生涯学習課係長、佐藤弘平氏と保健福祉課の課長補佐、蛭子智成氏それに社協スタッフなどが列席し小さいながらも多用途の複合施設としてのありよう



中高生などが利用する学習室

を検討し、地方創成補助金を町長が見つけてきて1.5億、町債が1.5億で建設されたとのことです。

企画時から関わった蛭子氏は子どもたちやお年寄りとの触れ合いを大事に動線設計にこだわったと述べられていましたが、トイレが外からも入れるようになっていたり、大きなキャノピーの下には子どもたちが素足で寝っ転がれる人工芝など様々に創意工夫が見られました。

平日は朝9時から夜9時まで、土日は夕方5時まで利用でき、お年寄りが七夕飾りを作っている映像など世代を超えた交流拠点として機能していることを学びました。

保健福祉課と教育委員会、社協などスクエアの運営に関わる行政等の綿密な提携があったればこそと感じ入りました。

宇多津町は人口18,000人余り、一般会計77億円の自治体ですが、子ども子育て、老人福祉の予算は十分にあり、生活福祉関連の予算割合が44%でした。ホームページによると町立病院を持たず、それが財政の自由度を上げていることがわかります。

一方で我が町においては町立病院も中標津モデルの大事な構成要件でありますので、その点をしっかり踏まえた上で、新しい福祉モデルを作る努力が求められることを痛感した次第です。

最後に玄関を出るとき受付の前に自由にお持ち帰りくださいと表記された棚と幟を拝見しました。賞味期限の近い食品を中心にむつまじく置かれていたように思います。運動の主体は全国組織のようでしたが、子ども食堂の運営よりは簡便で困っている人たちに直接手を差し伸べる手段としては効果的だと思いました。是非委員会として児童センターなどを念頭に可能性を研究してみるべきと思いました。



- 2 視察先 愛媛県四国中央市 子ども若者発達支援センター「palette」
- 3 視察日 令和7年5月13日（火）
- 4 視察事項 子ども若者発達支援センターについて
- 5 成果（具体的に）

四国中央市子ども若者支援センター、通称パレットは子どもの様々な個性や特性が集まり、成長や発達を支援し、社会へ送り出すための準備の場として設けられ、「いろいろな色を置き、混ぜ合わせて新しい色を作り出し、キャンバスに持っていくためのパレット」

に例えられています。その建築の概要は鉄筋コンクリート3階建て、総床面積約2,000㎡の平面プランがパレットのような形状の福祉部発達支援課の所管する建物で、障害の有無にかかわらず日常生活・社会生活を送るうえで困難を有する子ども若者への一貫した支援を行うために相談、療育、地域支援を一貫して果たすために2017年に開設されました。

四国中央市の前身である川之江市や伊予三島市において1970年代後半に対応施設の開設が始まり、合併後の2007年、発達支援課を設置し子ども若者発達支援センターの開設に力を注いできた努力の結果が、今日の発達障害の子どもたちに手を差し伸べる、あるべき姿を日本中に先駆けて実現していると思われます。組織全体で、公認心理士2名を含む37名のスタッフを有し、その他の専門家の在籍状況についても質問いたしましたが、わが町の状況よりはずっと安定した体制が維持されているようでした。

四国中央市子ども若者未来応援計画パレット・プランが第2期計画として策定されていますが、様々な個性や特性が尊重され、皆が安心して共に暮らせる地域社会を実現するため（法に基づかない）本市が独自で策定した行政計画であると高らかに宣言しています。

この報告書作成にあたって発達障害ということばを使用しましたがパレットにおいては発達支援という言葉が使われていることにも感銘を覚えました。各機能に分けられた部屋を見せていただきましたが、説明をされる作業療法士の方の自信に満ちた姿が印象に残っています。

他に中標津では位置づけられていない『地域支援』という概念が実行されており、保育所等訪問支援だったり、個別支援計画を本人・保護者とその時に最も関係している機関の担当者・担当者が集まる支援会議において作成・評価されるなど、一貫した適切な支援を地域をあげて提供していこうという気概を感じさせていただいた視察研修となりました。



- 2 視察先 愛媛県四国中央市 四国中央市役所
- 3 視察日 令和7年5月14日（水）
- 4 視察事項 ICT教育について
- 5 成果（具体的に）

教育委員会教育指導部学校政策課の鈴木課長より四国中央市における ICT の進捗状況について説明を受けました。

説明の冒頭、飛行機が5,000万人の利用者を得るのに何年かかったか、答えは67年、インターネットは37年、フェイスブックは3年、では生成AIは5,000万人の利用者を得るのにどれだけかかったかという質問をされました。答えは5か月ということで、技術の進歩、特にコンピューターに関わる世界の進歩は目覚ましく、これから社会人になっていく子ども達にどのような力を身に付けてもらうかにICTの重点を置いているとの目を丸くするような説明がなされました。

思うに四国中央市は日本の製紙工業の中心地であり、ここに生きる技術者たちと、その家族のライフスタイルを想像するに、酪農郷ののんびりした佇まいと大きくかけ離れた状況が見て取れました。

民間のソフト会社と提携して教職員の教育機会を充実し、資格者増を実現し、GIGAスクールサポーター9名を配置、授業改善のための提案もなされており、それらの人材は端末を提供受ける企業との契約で派遣を受け、生徒たちにはタイピング検定からプログラミングの構築実習、更にプラットホームを共用化して電子図書館を作り上げ、子どもたちをジュニアリーダーとして全国に派遣していました。

今後、教育データと公務データを統合するスマートフォンを支給して先生たちの業務が更に簡易に短時間でなされることを実現しようとしていました。

まさに全国のICTの先駆けを自覚しての取り組みが行われていました。

変化の激しい、未来を生き抜ける『未来の教室』を実現し、郷土愛の完成、シビックライトを養い、ふるさとに帰ってきてもらえる教育の一環としてICTに取り組んでいるとの説明をいただきました。

プロジェクターによる説明は添付資料がなくメモを取りながらの聴講でしたが、わが町の義務教育との落差に呆然とさせられた研修となりました。



四国中央市議会議事堂

- 2 視察先 香川県三豊市 バイオマス資源化センターみとよ
- 3 視察日 令和7年5月14日（水）
- 4 視察事項 バイオマス資源化センターみとよについて
- 5 成果（具体的に）

訪れた三豊市バイオマス資源化センターみとよは、ヨーロッパに起源をもつトンネルコンポスト方式によりおしめを含む生ごみ、ビニール、プラスチックを好気性細菌の発酵で17日間堆積し、発生する70℃の熱で分解、残渣を固形燃料として製紙工場への石炭代わりに提供し、ごみ問題を解決した事例です。

説明していただいた、株式会社エコマスターの執行役員鎌倉秀幸氏によると、従業員は鎌倉氏を含めて4人であり、石油による焼却ではない方式を模索した当時の市長のリーダーシップで設置され、(株)エコマスターは搬入ゴミ1トンに対し24,800円の処理費で運営を委託されているとのことでした。

発酵の際発生する臭気は木製チップを敷き詰め散水されるバイオフィルターにより無臭化され、近隣から苦情は出ていないとのことでした、

操業の結果生じる固形燃料を製紙工場で燃焼させることで年間二酸化炭素を6,500トン削減できるとのことでした。

一方で固形燃料には塩ビ残渣も含まれるためボイラーにはそれなりの燃焼装置が必要であることも説明されました。

トンネルコンポストの設置面積が必要なことから、広い土地のある中小自治体向けに、エネルギー需要とマッチしすれば持続可能なシステムであり、なおかつ温度維持が可能な建屋内で業務が完結できれば中標津や近隣の自治体のように生ごみを分別収集していなくても採用可能で、維持費の極めてかからないゴミ処理方式だと思いました。

石油を使わない処理を提唱した当時の市長と、システム構築に努力され、運営をされてきた民間事業者に心から敬意を表したく思いました。



- 2 視察先 兵庫県南あわじ市 松帆北認定こども園
幼老複合型ういずデイサービスセンター
- 3 視察日 令和7年5月15日（木）
- 4 視察事項 松帆北認定こども園（法人概要説明）
ういずデイサービスセンター（施設見学）
- 5 成果（具体的に）

先ず最初に訪問したのは松帆北にあるこども園で理事長の谷村氏から老人の介護現場において幼児が参加することは良い結果をもたらすという、評価のレベルを超えて必要なことだということについて説明を受けました。老人にとっては生きがいとなり認知予防に効果があり、幼児にと



っては丁寧に話を聞いてくれるお年寄りに安心感を覚え愛着する。そのことが後の子どもの人格形成・社会性の涵養に大きな成果を上げることを指摘されました。

実際にういずデイサービスセンターを訪問した時、おばあさんたちが赤ちゃんを抱っこしていましたが、とても幸せそうでした。ちょうどお誕生祝いをされていたが、介護にあたるスタッフの笑顔が印象的でした。説明をしてくださった中尾さんは介護士と保育士の両方の資格を持っているそうで、ここで働くスタッフの定着率も他と比較するととても良いのだと話されました。

自分にはなんの値打ちもない、人を殺して死刑になりたいなど自己肯定感を持ってない人々がたくさん犯罪を犯す昨今、幼老共生こそが人間社会を円滑にしていくためのカギなのではないかと深く考えさせられました。



機会を捉えてこのういずデイサービスセンターで学んだことを提起していかなければならないと強く思ったところです。